

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

【図書紹介】『ヘーゲル講義録入門』（寄川条路編、片山善博・小井沼広嗣ほか著 法政大学出版局 二〇一六年）

著者	大橋 基
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	14
ページ	68-68
発行年	2018-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/13881

【図書紹介】

『ヘーゲル講義録入門』

（寄川条路編、片山善博・小井沼広嗣ほか著 法政大学出版局
二〇一六年）

大橋 基

編者の「まえがき」によれば、本書は「ヘーゲル哲学を『講義』によって形成された哲学体系」として新たに定義し直す」ことを目指している。そして、そうした企画の機縁となったのは、二〇一五年、校訂版『ヘーゲル全集』（一九六八年―現在、全三〇巻）のうち「第二部 講義録」が完結し、学生のノートをそのままの形で掲載したがゆえに数多くの未確定な問題を残していた、いわゆる試行版『ヘーゲル講義録選集』（一九八三年―二〇一四年、全一七巻）に依拠する段階を脱して、「ヘーゲルが書いたもの」と「学生が書いたもの」を明確に区別した上で、ヘーゲル哲学の全体像を再考できるようになったことにあるとされる。

周知のように、ヘーゲルがその生涯で残した著書は五冊にすぎず、雑誌論文・批評・翻訳を含めても、公刊された著作は少ない。『全集』を見渡しても「第一部 著作」の大半を占めるのは、草稿やメモの類である。しかも、ヘーゲル哲学の一般的印象を決定づけてきた歴史哲学や美学、

宗教哲学や哲学史は、その概要が『エンチクロペディー』に記されているにせよ、過去の編集者による加筆・省略・継ぎ接ぎによって作られたものすぎないのである。

そうした事情ゆえに、講義録研究は、見解の変化やその理由に注意を払いながら、そのときどきのヘーゲルの知的格闘を「聴き取る」というアプローチを要求する。そして、その結果、本書に掲載された各種講義録の分析は、ヘーゲルの多元主義的な素顔を読者に垣間見せるものとなっている。つまり、教壇で語るヘーゲルは、目の前の研究テーマに取り組むにあたって、まだ理解の行き届かない事柄や自身と異なる考え方を尊重する態度を保っており、「自分の学説の権威づけに腐心する老いた哲学者」という従来のイメージを覆すような姿で立ち現れているのである。

以上のような本書の魅力は、講義録という素材のみに由来するものではなく、執筆者十三名の研究姿勢に負うところが多々ない（そこには、本学会会員の片山善博氏（『芸術哲学講義』担当）や小井沼広嗣氏（『神学講義』担当）の名前もある）。なぜなら、本書の意図を実現するには、既存のヘーゲル像に依拠するという誘惑を振り払い、知的好奇心と意志の強さが不可欠だからである。彼らが、各々の瑞々しい感性を活かして、今後の研究を押し進めていくことを期待したい。